

優れたローカル社員

1997（平成9）年秋、フィリピンの合弁会社にローズ・アンドリオンの名乗る女性が面接に来た。彼女は公認会計士の資格を持つ才女だ。面接したロリータ・シーは合弁相手の社長夫人で、御主人共々スタンフォード大学卒というエリートだ。「イトウサン、彼女はとても優秀な人物だ」と自信を持って紹介してくれた。

これで経理は上手くやってくれと期待した。海外では自分の与えられた業務以外はやらないと聞いていたのだが、ローズは日本人以上に広範囲の仕事に打ち込む。その姿勢は学ぶべきところが多い。

後進国では社員の不正は日常茶飯事で、常にチェックする必要があるが、ロ

伊藤製作所社長

伊藤 澄夫 32

ーズは部下の不正にも目を光らせていた。ある時、運転手が500バ程度の買物を買った。彼は領収書に「1」を書き加えて、1500バとして請求したが、購買の女性が商店に問い合わせて不正が発覚した。ローズは直ちに本人を呼び、その場でクビにした。

「そこまでやらなくても」と注意すると、「イトウサン、こうすることが抑止力になるのです」ときっぱり。本人駐在員がそれをやると角が立つ。ローカル幹部がやってくれることは大助かりだ。

頭が切れる彼女は経営に関してさまざまな提案をしてくれる。彼女の提案を極力、受け入れていたが、時には「日本ではこうだから」と考え方を否定することがある。ローズはその度にいつも食い下がってきた。しかし、日本式経営手法が良いと認めれば、受け入れるようになり、現在では日本人以上に日本式流儀で業

現地社員を信頼する

ローズ・アンドリオン



務を行うようになっていく。彼女は「イトウサンが私やローカル社員を信用してくれるからやりがいがある」と今も言う。

入社から7年もすると、ローズの優れた能力が外部企業にも伝わるようになってきた。数社から、当社の支給金額に30%程度上乗せした給与で引き抜きがあったらしい。しかし、「私が辞めれば部下が幸福になれない。それにイトウサンは、業績が上がれば必ずそれに見合った待遇をしてくれる」と、引き抜きを断った理由を後に打ち明けてくれた。そのようなローズに対して現在は十二分の待遇をしているつもりだ。そのころローズには、ローカル社員としてただ一人、会社の株を買うように勧めた。このことがローズをさらに勢いつけることになる。

マイ
my way
ウェイ